

平成十七年十月イワクラ学会

研修ツアーに参加して

会員 川合重孝

十月二十二日 第一日目

山添村で発掘された真球状の巨石や柳原さんが発見したという夏の夜空に輝く天の川を地上に模した超古代遺跡? 等等、かねてよりこの眼で確かめたいものと念願していたのだが、この度イワクラ学会研修ツアーに参加することでそれが実現した。以下簡単な御報告をさせていただきます。と思います。

自分でイワクラ巡りをしようと思えば、あてどもなく歩くしかないところを、こうして近くまでバスに乗り、現場まで案内してもらえるところは、まことにありがたいことであった。おかげで効率よくたくさんイワクラを見学することができた。先達はまことに有難いものである。近鉄榛原駅を1時過ぎ、遠くは九州や東京から参加された約20名の会員の皆さんとともに山添村の奥谷さんの案内で出発。最初に連れて行っていたのは立石、蛇石。バスから降りて、しばらく歩くと見えてきたのが立石。林道工事で元の位置より移動されているとのことであったが確かに超古代人のモニユメントという感じがする。そこからさらに山道を進んでゆくとあちこちに嶽太郎や蛇石、三本の巨石が立ち並んだ嶽三郎、次々と巨石文明の痕跡を見て回るこ

とができた。柳原さんは蛇石に刻まれた雨樋状の窪みを丹すなわち朱砂を取り出すときに用いた水路跡ではないかと言われたがは果たしてどうであろうか。丹生という地名、この地が古来水銀の産地であったこと、所々に鏡岩と呼ばれる磨かれたように平板な石の存在、磨いた石面に水銀を塗って光る道しるべとしたとの説も確かに興味深いものがある。日本書紀の神武天皇が大宇陀の地より大和に入るときにナガスネヒコの軍勢が目くらましにあつて皆ひれ伏したというのは鏡を使う技術を持っていたからだという説がある。そういうのは九州高千穂や瀬戸内の高島、など不思議と神武伝説とかかわりがあるところが多いようである。イワクラはもちろん有史以前の縄文人の遺したのか或いはそれ以前のものかも今の私たちには謎のままである。

途中、永仁の磨崖仏による。規模は大きくないが永仁は鎌倉時代、これは明らかにイワクラに彫りこんだものとわかる。雨が強くなったので、明星岩は取り止めて鍋倉溪に向かった。600メートルあまりも黒っぽいごろごろ石が水無瀬川を形成している鍋倉溪は、柳原氏が天の川を地上に写したものと、ベガ、デネブ、アルタイルの大三角形に該当する岩も発表されている。かのギザのピラミッドがオリオンの子三ツ星だといったハンコックと同様に衝撃的なお話ではある。紅葉にはまだ早かったがここは県立公園として整備された景勝地である。

十月二十三日 二日目

二日目のコースは奥谷氏の言われる「イワクラの道」、すなわち南北方向マイナス約30度、笠置山に向けてほぼ直線状に点在する巨石、イワクラを探訪するものである。

岩屋の杵型岩は一带が弘法大師が開いたとされる霊場で近くに真言密教の行者が籠もる御堂も設えてある。こんなところにこれほど巨大な巨石文明遺跡があるとは聞いたことがなかった。何百トンかは知らないが巨岩が支えの石に載り、その下は人が立つて歩けるほどの広さの空間があつて、修行僧が持ち込んだであろう仏像も何体か置いてある。そこから奥にすすむと一万余年前まで生息していたという古代獣の頭を模つた石（私にはこの石は私たちの祖先が彫つた靈獣又エに見える）を手前にして、完璧な磐座が杉林の中に出現した。ここは貴重な超古代文明の遺跡なのだ。数年前にイギリスやアイランドで先史遺跡の巨石をいくつか見てきたがこの国の巨石文明遺跡は質量ともにそれらと比しても勝るとも劣らない、いやはるかに豊富であると思う。古い神社の裏に鎮座するイワクラこそ日本人の祖先が祭り遺した跡であり、これらこそ日本人の心のふるさとなのだと思う。

さて、驚くのはまだ早かつた。杵

型岩というのは山上にある硯の様に磨かれた巨大石のことであつた。その大きさは高さ8〜9メートル幅は4メートル程もある石を中心に両脇を大石で固めてある。まんなかの石はゆるく中央が窪まつて円柱の内面の凹面を思わせる。鏡の様に表面を加工して使つたのだろうか。岩の根元には祠があつて、後代の人たちも祖先の祭り跡に神聖な靈気を感じこのように神社や仏教のシンボルを設けるのは洋の東西を問わないことが解る。

「イワクラの道」を順にたどつていく。丹生村の巨石。丹が生まれるとはあまりに直接的だがこのような地名考察についてもイワクラともどもよく研究してみる必要があるだろう。この地の植林されよく手入れされた山林のなかにイワクラが幾千年万年の歳月、じつとたたずんでいたことを思えば胸に迫るものがある。

山添村の真球状巨大石は写真で見てもらうのがいいでしょう。すでに權威ある学者は自分の学問体系からは離れたものにはきわめて冷淡であり、見なかつたことにするばかりか積極的に破壊工作にあたる場合が往々にあることは歴史の真実である。アマチュアの魂による直感こそ真実に近いこともあることを肝に銘じなければならぬ。こんな巨大な石のポールはいったい何なのか？紙面がつきそうなので後は駆け足で報告します。

邑地のイワクラは農林省が茶畑として切り拓いた広大な農園に大きな餅をいくつも集めたように出現している。これも大きい。みんなで記念写真を撮つた。人の大きさと比較すればイワクラのスケールがわかるだろう。このあたりにまだたくさんイワクラがあつたが農園開拓工事の際に多くは破壊されたという。

柳生の天石立神社の御神体は平板に磨かれた石が衝立のように立てられ、苔むした有様が年月を感じさせる。更に奥へ進むと一刀両断された様な柳生の一刀石がある。圧巻は最

後の笠置山であつた。是非多くの皆さんに行つてみて欲しい。笠置山は後醍醐天皇の行在所のあつたところで、今も残っている。それよりこれより巨大イワクラこそ笠置山の真骨頂といふべきで、あちこちに圧倒せんばかりの巨岩が配されています。笠置山の話だけでもレポートは何枚もかけそうですが、実際に見てみる方が断然迫力があると思しますのでこれくらいにします。

(了)